

多次元ニュートン法

野下浩司

2018-05-21

多次元ニュートン法を用いて、被食-捕食系の平衡点を見つけることを目指す。ここでは出来るだけ簡単な方法でプログラムを書こう。

1 解きたい問題

被食-捕食系

$$\begin{cases} \frac{dx}{dt} = ax - bxy & (1) \\ \frac{dy}{dt} = cxy - dy & (2) \end{cases}$$

の平衡点を数値的に求める。ただし、 $x, y, a, b, c, d \geq 0$ とする。解析的には $\frac{dx}{dt} = 0, \frac{dy}{dt} = 0$ を解けば良いので、 $(0, 0), \left(\frac{d}{c}, \frac{a}{b}\right)$ の2つが平衡点として求まる。よって、これら2つの平衡点を数値的に求めることが今回解きたい問題となる。

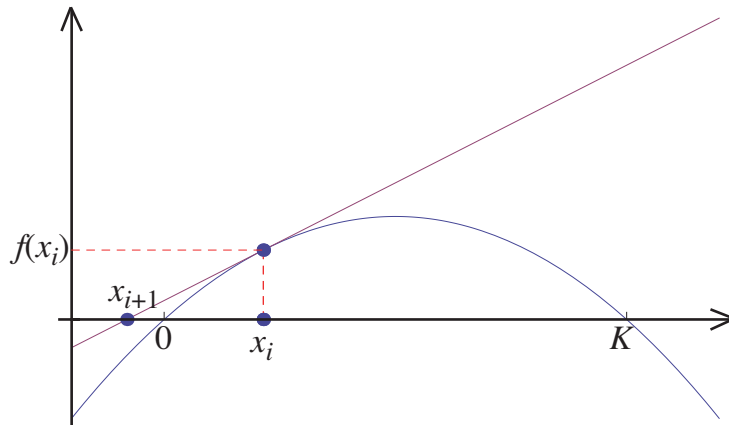
2 1次元の場合の復習

ロジスティック成長モデルを例に、1次元の場合を復習する。多次元の場合はその自然な拡張になる。

一般の1次元ニュートン法では $f(x) = 0$ の近似解を求めるために、

$$x_{i+1} = x_i - \frac{f(x_i)}{f'(x_i)} \quad (3)$$

を適当な初期値 x_0 から始めて、 x_1, x_2, \dots, x_n と次々に求めればよかった。これは x_i での $f(x)$ の接線の x 切片をより良い近似値 x_{i+1} として採用してゆく、と解釈できる。



よって、初期値によって得られる近似解が異なる。

ロジスティック成長モデルを例にプログラムを組んでみよう。

$$\frac{dx}{dt} = r \left(1 - \frac{x}{K} \right) x \quad (4)$$

この場合、平衡点は $x_1^* = 0, x_2^* = K$ となる。これら2点を数値的に求める。通常、どの程度の精度で近似するかによって反復回数の制御を行うが、今回は単純化のため1000回の反復で計算を打ち切ることにする。接線の傾きは

$$f'(x) = r \left(1 - \frac{2}{K}x \right) \quad (5)$$

なので、

$$x_{i+1} = \frac{x_i^2}{2x_i - K} \quad (6)$$

よってプログラムは

```
#include <stdio.h>
```

```
int main(void){
```

```
    int i;
```

```
    double x,xx,K;
```

```
    //パラメータ設定
```

```
    K=100.0;
```

```
    //初期値
```

```

x=10.0;

for(i=0;i<1000;i++){
    xx=x*x/(2*x-K);
    x=xx;
}

printf("%f\n",x);

return 0;
}

```

初期値に依存して、 $x_1^* = 0$ 及び $x_2^* = K$ のどちらかが数値的に求められる。

3 n 次元のニュートン法

では、 n 次元の場合に拡張しよう。

$$f(\mathbf{x}) = \mathbf{0} \quad (7)$$

という連立方程式を解くことを考える。ただし、

$$\mathbf{x} = \begin{pmatrix} x_1 \\ x_2 \\ \vdots \\ x_n \end{pmatrix}, \quad f(\mathbf{x}) = \begin{pmatrix} f_1(x_1, x_2, \dots, x_n) \\ f_2(x_1, x_2, \dots, x_n) \\ \vdots \\ f_n(x_1, x_2, \dots, x_n) \end{pmatrix} \quad (8)$$

$f(\mathbf{x})$ の $\mathbf{x} = \mathbf{x}_i$ での一次近似（高次元での“接線”）を考えると、

$$\mathbf{g}(\mathbf{x}) = f(\mathbf{x}_i) + \left. \frac{\partial f}{\partial \mathbf{x}} \right|_{\mathbf{x}=\mathbf{x}_i} (\mathbf{x} - \mathbf{x}_i) \quad (9)$$

となる。 $\frac{\partial f}{\partial \mathbf{x}}$ はヤコビ行列。 $\mathbf{J}_{\mathbf{x}_i} = \left. \frac{\partial f}{\partial \mathbf{x}} \right|_{\mathbf{x}=\mathbf{x}_i}$ とし、 $\mathbf{g}(\mathbf{x}) = \mathbf{0}$ となる \mathbf{x} をより良い近似解 \mathbf{x}_{i+1} として採用すれば、

$$f(\mathbf{x}_i) + \mathbf{J}_{\mathbf{x}_i}(\mathbf{x}_{i+1} - \mathbf{x}_i) = 0 \quad (10)$$

$$\mathbf{J}_{\mathbf{x}_i}(\mathbf{x}_{i+1} - \mathbf{x}_i) = -f(\mathbf{x}_i) \quad (11)$$

$$\mathbf{x}_{i+1} - \mathbf{x}_i = -\mathbf{J}_{\mathbf{x}_i}^{-1} f(\mathbf{x}_i) \quad (12)$$

となり,

$$\mathbf{x}_{i+1} = \mathbf{x}_i - \mathbf{J}_{\mathbf{x}_i}^{-1} \mathbf{f}(\mathbf{x}_i) \quad (13)$$

を得る. 1次元でのニュートン法と見比べてみると, 高次元への自然な拡張となっていることが分かる. しかし通常は, これを直接扱うのは (逆行列の演算が入っているため) 厄介なので,

$$\Delta \mathbf{x}_i = \mathbf{J}_{\mathbf{x}_i}^{-1} \mathbf{f}(\mathbf{x}_i) \quad (14)$$

として, これを満たす $\Delta \mathbf{x}_i$ を

$$\mathbf{J}_{\mathbf{x}_i} \Delta \mathbf{x}_i = \mathbf{f}(\mathbf{x}_i) \quad (15)$$

に対しガウス-ジョルダンの掃出法や LU 分解などを用いて解くことで求める.

今回は, 行列の演算は本題では無いので, 逆行列を求め直接計算することにする.

4 被食-捕食系 2次元の場合の例として

被食-捕食系の微分方程式系を確認し, ニュートン法に必要なヤコビ行列とその逆行列を求めよう.

$$\begin{cases} \frac{dx}{dt} = ax - bxy \\ \frac{dy}{dt} = cxy - dy \end{cases}$$

の右辺をそれぞれ $f_1(x, y), f_2(x, y)$ とすれば,

$$f_1(x, y) = ax - bxy = 0 \quad (16)$$

$$f_2(x, y) = cxy - dy = 0 \quad (17)$$

平衡点を求めるためには, この連立方程式を解けば良い. ニュートン法により解を求めるため, まず, $\mathbf{f}(x, y)$ のヤコビ行列を求める. 求めるヤコビ行列を \mathbf{J} とすれば

$$\mathbf{J}(x, y) = \begin{pmatrix} \frac{\partial f_1}{\partial x} & \frac{\partial f_1}{\partial y} \\ \frac{\partial f_2}{\partial x} & \frac{\partial f_2}{\partial y} \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} a - by & -bx \\ cy & cx - d \end{pmatrix}. \quad (18)$$

よって, ヤコビアンは

$$|\mathbf{J}(x, y)| = acx + bdy - ad \quad (19)$$

となり, $\mathbf{J}(x, y) \neq 0$ の場合のみを考えれば, 逆行列はクラメールの公式を用い

$$\mathbf{J}^{-1}(x, y) = \frac{1}{acx + bdy - ad} \begin{pmatrix} cx - d & bx \\ -cy & a - by \end{pmatrix} \quad (20)$$

と求まる。最終的に,

$$\mathbf{x}_{i+1} = \mathbf{x}_i - \mathbf{J}_{x_i}^{-1} \mathbf{f}(\mathbf{x}_i) \quad (21)$$

$$\begin{pmatrix} x_{i+1} \\ y_{i+1} \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} x_i \\ y_i \end{pmatrix} - \frac{1}{acx_i + bdy_i - ad} \begin{pmatrix} cx_i - d & bx_i \\ -cy_i & a - by_i \end{pmatrix} \begin{pmatrix} ax_i - bx_i y_i \\ cx_i y_i - dy_i \end{pmatrix} \quad (22)$$

$$= \begin{pmatrix} x_i \\ y_i \end{pmatrix} - \frac{1}{acx_i + bdy_i - ad} \begin{pmatrix} acx_i^2 - adx_i \\ bdy_i^2 - ady_i \end{pmatrix} \quad (23)$$

$$= \frac{x_i y_i}{acx_i + bdy_i - ad} \begin{pmatrix} bd \\ ac \end{pmatrix} \quad (24)$$

よって、プログラムは以下のようなになる。

```
#include <stdio.h>

int main(void){
    int i;
    double x,xx,y,yy;
    double a,b,c,d;
    double x0,y0;

    //パラメータ設定
    a=2.0;
    b=3.0;
    c=1.0;
    d=2.0;

    //初期値
    x=1.5;
    y=0.5;

    for(i=0;i<1000;i++){
        xx=b*d*x*y/(a*c*x+b*d*y-a*d);
        yy=a*c*x*y/(a*c*x+b*d*y-a*d);
        x=xx;
        y=yy;
    }
}
```

```
    }  
    printf("%f, %f\n", x, y);  
  
    return 0;  
}
```

初期値に依存して、平衡点 $(x_1^*, y_1^*) = (0, 0)$, $(x_2^*, y_2^*) = \left(\frac{d}{c}, \frac{a}{b}\right)$ のいずれかが数値的に求まる。

基本的に、より高次元の場合にも同様に適用できる。